
学校を取り戻す物語。

眠井京盛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

学校を取り戻す物語。

【Nコード】

N5669Y

【作者名】

眠井京盛

【あらすじ】

度重なる経済の悪化に伴い、世界が食糧危機に陥る。これがきっかけとなり第三次世界大戦が勃発。世界各国の残存兵力を使い切るような消耗戦が繰り広げられ、ついには核弾頭の撃ち合いに発展。一年後、すべての兵力を使いきり、ただ一国も勝利者のないまま終戦。しかし、世界の国々にはもはや満足に国の機能を維持できるほどの人口は存在していなかった。これにより国家の解体が起こり、共に教育機関も解体されていく。

そのような中、ある少年たちが学校解体の反対運動を起こす。こ

れは、自分たちが学び、成長する場である『学園』を取り戻すために奮闘する少年たちの物語。

プロローグ（前書き）

はじめまして、眠井京盛です。
これが初の投稿になります。

これをお読みになった方々が、少しでも楽しい時間を過ごせていた
だけたら幸いです。

プロローグ

2023年4月26日。

高校2年生に成りたての俺は、体育館に立っていた。

体育館にはこの学校に通う生徒が、きれいに列をなして並んでいる。

そうやって形作られる列の一員、それが俺だ。

自分がきちんと列の一員に成れていることを確認し、あとは時間つぶしのため周囲を観察することにした。

右手には新しく入学してきた1年生が、少し互いの距離を開けて並んでいる。

まだこの学校に馴染みきっていないことが手に取るように分かった。

左手には最上級生となったばかりの3年生。

彼らは一言もしゃべらず、生徒たちの手本というように整列していた。

そして、彼らに挟まれるように、俺たち2年生が並んでいる。

なんのために？

そんなことわかりきっている。

これから聞かされることなど、ここに集まったすべての生徒がすでに理解しているだろう。

俺はもう一度周りを見る。

今度は一人一人を確かめるように。

1年生は皆うつむき、不安そうな顔をしていることが分かった。

3年生の方に目を向けると、こちらは一樣に悔しそうな顔を浮かべていた。

なかには涙しているものもいたが、声は出さず皆、黙していた。

そして俺たち2年生は……、ほとんどのものが無表情であった。

1年生のように不安をあらわにするわけでもなく、3年生のように悔しさに涙するわけでもない。

不安も悔しさも感じた上での、諦めゆえの無表情なのだ。

総じて一つ言えることは、ここには誰一人として嬉しそうにしているものなどいないということだ。

やがて幾許イクバクかが過ぎ、この鳳声高校の校長が壇上にあがった。

行事があるたびに笑顔で生徒たちの前に立っていた初老の校長。

その顔には疲労が強く張り付いていることが一目して見て取れた。

列の後ろ寄りに並んでいた俺にも確認できたのだから、ここにいる生徒全員すぐに見て取れただろう。

校長は体育館に整列する生徒たちを一年生の方から、まるで一人一人己の記憶に刻み込むように眺めていく。

そして一拍の後、マイクを手に取り、喋り出した。

「今日はこのような情勢の中、こんなに沢山の生徒が集まってくれて嬉しく思います」

彼は言う。

たくさんの生徒と……。

唇をかみしめ、俺は溢れてくる思いを押し込めた。

——これのどこがたくさんなのかつ！

ここには1年生から3年生までのほとんどの生徒が整列している。

しかし、俺たちが占有している面積は体育館の1／4程度。

体育館の半分も埋まってはいない。

体育館が広いのではない。

——俺たちが少ないのだ。

ここに集まっている生徒は多く見積もっても100名程度。

——そうだ、俺たち生徒があまりにも少ないのだ。

「みなさんも知っているとありますが、先日全世界を巻き込んだ戦争がやっと終わりました」

俺の思いとは関係なく、校長の話は続いていく。

「現存している各国の代表たちは、昨日他国と比べ戦禍が少ないわが国の東京に集まりました。

そして、一年にも及んだこの第三次世界大戦の終戦を宣言したのです」

——そんなこと知っている。

俺たちは皆、昨日世界に向けて一斉放送された終戦宣言をすでに聞いているのだから。

「それに伴い、各国の代表たちは今月をもって国を解体することを決めました。

とても悲しいことですが、日本も解体されます。そして教育機関である学校も国の解体に伴い廃止になることが決まりました」

まさしく言葉のとおり。

俺たちの生まれた国、日本はなくなる。

かつて世界を支配しているともいわれたアメリカも、ヨーロッパの各国も隣国の中国もすべて消えるのだ。

だが俺にとってはそんなことはどうでもよかった。

これは大人たちが始めた戦争だ。

その結果なんて知ったことではない。

しかし。

しかしだ。

——なんで俺たちが過ごした学校までなくならなければいけない。

理屈では分かっている。

俺たちの国、日本がなくなるのだ。

その教育機関である学校も廃止になることは当然である。

だが、これは理屈じゃない。

この気持ちは理屈じゃねえんだ。

大人たちの理屈で、なんで俺たちの居場所が奪われないといけないんだ……。

なんで大人たちの都合で俺たち、子供から奪っていくんだ。

胸が、奥から溢れてくる思いで一杯になる。

かみしめた唇からはうっすらと血が滲んでいく。

評論家ぶった大人たちは言う。

俺たちのことを『奪われた世代』だと……。

——ふざけるな。

奪ったのはお前たちだろう。

奪われた世代。

大人は俺たちをそう呼んだ。

俺たちが生まれたのは、世界全てが不況の時代だった。

——未来がない時代に生まれ、将来を語ることが奪われた。

やがて世界には食糧危機が訪れた。

食料の供給が日々減っていき、値段が高騰していく。

——食べ物がない時代に生き、明日を想うことを奪われた。

果ては全世界を巻き込んだ戦争が始まった。

——生き残ることが難しい時代の訪れに、同年代の多くの命さえ奪われていった。

君たちは悲しい時代に生まれたのだ。

君たちは今までもこれから奪われていくだろう。

大人たちはそのような思いで俺たちを見る。

そして口々に語るのだ。

なんてかわいそうな子達だろうと。

そして今、俺たちは学ぶことさえ奪われた……。

プロローグ（後書き）

次はこの小説の世界観を書いていこうと思います。
もしかしたら年表みたいになっちゃうかも……。

感想、指摘等ありましたら、是非ともよろしく願います。

第 1 話：奪われた世代

『奪われた世代』と呼ばれた俺たちが生まれたのは、まるで世界が終わりを迎えるような時代だった。

日々悪くなる情勢。

悪化の止まらぬ不況の時代。

おわりが見えぬ不況の訪れ。

街には不安や絶望があふれ、人々から笑顔が消えていく。

そんな時代だったんだ。

2007年。

アメリカでのサブプライムローン問題に端を発した、金融危機はまたたく間に世界に波及した。

倒産の危険はないと呼ばれた金融機関が当たり前のように消えていく。

これが後の第二次世界恐慌の始まりだった。

金融機関の倒産により、世界経済は大打撃を受けた。

この時代はグローバル化の時代。

各国の連携こそが正しいと、愚直に訴えた時代だったのだ。

そのため、世界に影響力のある国が傾くと、後はドミノ倒しのごとく他の国々までもが傾き、不況に巻き込まれていった。

アメリカ一国の金融危機が、世界同時不況の始まりを告げたのだ。

そして2011年。

世界に蔓延していく不況の影は一向に回復の兆しを見せることなく、ついにその姿を露にする。

事はEUの一国、ギリシャで起きた。

ギリシャでは、経済の不振、失業率の上昇が深刻化。

さらには国家債務が返済不可能な領域に達した。

結果、ギリシャ経済は立ち行かなくなり、EUに支援を要請。

これによりEUの各国を巻き込み、急激なユーロ安を引き起こした。

米ドルもサブプライムローン問題を発端とし低下の一步をたどって

おり、ユーロまでそれに追隨することとなった。

世界の2大通貨の低迷、その煽りを一番に受けたのは日本だった。

日本は自国の経済成長を伴わぬ円高を起こしたのだ。

そのあまりにも不自然な円高は、第二次世界大戦後初めての1ドル70円台を記録した。

その急激な円高により、日本もまたたく間にかつてない不況に陥る。

しかし、この円高の影響はこれだけにとどまらなかった。

繰り返しになるが、この時代の経済はグローバル化しており、モノの生産だけをとっても自国だけで全てを賄うことは稀である。

人々の生活には欠かせないものとなったPCひとつとっても、そのパーツの一つ一つは台湾、中国、韓国などで生産されている。

これは周知の事実であろう。

そのような時代の中で、日本は技術大国であった。

意外と知られていないことかもしれないが、

日本の下町の中小企業があるモノの製造に必要なパーツの生産を一手に担っている、

などという状況はざらであったのだ。

一例を挙げるなら、普段目になっている液晶一つとっても、その必要なパーツの一つは日本の某企業が世界シェアの80%を生産してい

るのだ。

そのような日本で円高が起これるとどうなるか……。

——もうお分かりだろう。

ほぼ寡占状態にあるこれらのパーツが値上がりを起こすのだ。

これにより、中国、韓国、台湾などを代表として各国の企業が打撃を受けることとなった。

このようにしてアメリカで端を発した不況の波は、各国に波及し、他の国を飲み込むごとにその波を大きくして、様々な国々に影響し合い、一度ならず何度も世界の国々を襲ったのだった。

これに危機を思えたアメリカは、悪化の一途をたどる自国の経済を回復させるために、経済の連携を名目としFTA、TPPなどの経済連携協定を発足させる。

しかし、これらの政策はアメリカ経済のみを一時期に回復させたが、世界の不況を加速させるばかりであった。

2015年。

世界経済は悪化の一途をたどり、EU経済に回復の目処が立たないことにしびれを切らしたイギリス、ドイツを代表とした5ヶ国がEUの脱退を表明。

これにともない、ギリシャへの財政支援の打ち切りをEUが決定。

翌年の2016年。

ギリシャ政府が国連に対して事実上の経済破綻を表明。

これを発端とし、なんとか持ちこたえていたユーロが暴落。

これを見越していたEU各国は、沈む船から逃げるネズミの如く、次々にEUから離脱を宣言した。

そして、ついにEUは解散を迎える。

この時、世界経済は最早ポイント・オブ・ノーリターンをすぎていたのだと、後の学者は告げることになる。

2017年。

ユーロ暴落の影響もあり、数々の政策をするもアメリカ経済は回復することができず、ついにアメリカ大統領は第二時世界恐慌を宣言。

同時に米ドルの暴落が起きる。

そして、FTA、TPPなどによりアメリカ経済を支えていた各国にもその余派が波及する。

最後には基軸通貨の暴落を受け、世界各国の通貨が暴落を起こすこととなった。

2018年。

アメリカが国連の脱退を表明。

同時に自国で食料をある程度生産できるアメリカはブロック経済に移行。

それに追随し、食料自給率の高い国（発展途上国の一部、カナダ、ブラジル、ロシア、中国など）がブロック経済への移行することを決める。

グローバル化の時代は終わりつつあったのだ。

同年、アメリカに対するテロが多発した。

この事件の裏にはテロ組織に対する兵器の売買や横流し急激な増加が絡んでいる。

テロ組織に対し国単位の支援を行い、アメリカに対する間接的攻撃の意図があったのは言うまでもないことである。

この事件を発端に、アメリカという国がもはや国民を守るだけの力がないことが露呈し始める。

2019年。

離脱していく国々を留めておけず、ついに国連が解散を宣言。

それに伴い、様々な共同体が解散していった。

これにより正式に国際社会が終わりを迎えることとなる。

2020年。

人々は有史以来はじめての世界規模での食糧危機を迎えることとなる。

自国で必要料の食料を生産する力がある国が次々にブロック経済へ移行していく。

残された国はというと、当然食料の補給に問題が生じていく。

食糧危機の訪れだった。

この時、日本はというと、ある天才科学者が革新的な食料生産技術（様々な高分子を単位物質まで分解し、それを好きなように再構成する技術）を発明。

食料危機が起こることを予期した政府がこれ政府の威信と莫大な費用をかけて秘密裏に実用化。

食料は配給制とはなったものの、すべての人が飢えるような深刻な食糧難を逃れることができた。

回避できたといっても、毎日満足のいくる食事にありつけたのは金、権力のある者たちだけなのだが。

しかし、食料自給率の低い他の国々はひどい状況だった。

自国の備蓄が尽きるまでに何としても食料を入手しなければいけないのだから。

各国は食料の補給に手段を選ばなくなっていく。

先進国たちは日本が保有している食料生産技術を何としても手に入れようと、軍事力を盾に交渉を行なった。

これにより世界の主要都市に食料生産プラントの建造を約束させる。

しかし、これで解決できるほど問題は簡単ではなかった。

この時既に、各国に食料製造プラントを必要十分なか建造する時間に残されてなかったのだ。

各国はさらなる解決案を模索する必要に迫られる。

その間にも食糧危機は深刻化していった。

一番に被害が表面化したのはアフリカだった。

アフリカ大陸では深刻化した食糧危機により、飢えによる死者数が過去比較にならないほどになってしまったのだ。

これによりアフリカ各国では暴動が発生。

ついには国民を抑えきることができなくなり、事実上の国家の破綻が起きた。

このことにより、ヨーロッパを始めとした各国がアフリカへの支援を名目とし、軍を派遣。

しかし、支援とは名ばかりのこと。

食料生産のための土地の確保を目的とした、アフリカ侵攻を開始したのだった。

どの国も食料を生産できる土地の確保に必死で、もはや手段を選んでいられる状態ではなかったのだ。

アフリカでは各国の軍が入り乱れ、各所で衝突がおこる。

その結果、アフリカの住民は土地を奪われ、戦火を逃れるために南下を開始。

2021年。

このことを深刻視した日本は急遽食料生産プラントを旧南アフリカ領に建設。

難を逃れてきたアフリカ住民の救済を図った。

これを知った各国は、アフリカの土地の確保に加え、食料生産プラ

ントの占領を戦略目標に加え、アフリカの侵攻をさらに激化させていく。

これに対抗し、食料生産プラントを守るため、生存者によるアフリカ解放軍が組織され、各国の軍と衝突。

この争いがきっかけとなり、アフリカを舞台とし各国での全面戦争が開始される。

2022年。

ついに戦火はアフリカだけにとどまらず、全世界へと飛び火していく。

これにより第三次世界大戦が勃発した。

この戦火を逃れた国なかった。

始まりから泥沼状態の戦いは、ついには消耗戦となる。

戦いが佳境を迎えた頃にはもはや航空戦力、ミサイル等を保有している国はなくなっていた。

これは単純に航空機を飛ばすほどの燃料がなくなり、その生産拠点、さらにはミサイルの生産拠点等が戦争初期の潰し合いでことごとく破壊されており、補給することが困難になっていたためである。

また製造に必要な原材料の入手も困難になっており、補給が立ち行かなくなったという理由も含まれる。

そのような中、国々は最後まで残された兵器を消耗し始めた。

この時まで残された兵器、それは最終戦略兵器であり、核弾頭である。

まるで戦争の最後を飾るように、核保有国の戦術核による主要都市の潰し合いが起きたのだ。

その過程を経て、一年後。

最早戦いを継続できる国は世界に存在しなかった。

各国はほぼすべての核弾頭を打ち尽くした時点で、核の標的とはならなかった日本の東京に各国の代表が集まり4月25日に終戦を宣言。

この時点で世界の多くが核で汚染され、人類の生存可能圏は少なくなっていた。

さらに世界人口は10億人程度まで減少。

最早、世界のどの国も、その機能を満足に維持できなくなっていた。

日本の東京も核の標的とはならなかった（東京は主要技術の集積地であったため、日本が表立った武力を持たないこともあり、その破壊より占領が目的とされていたため）が、戦略的占領目標と設定されており、一部を除き都市はその機能を失っていた。

これにより終戦宣言と共に国家は解体された。

しかし皮肉なことに、戦争のきっかけとなった食糧危機は世界人口の急激な減少により解決されたのだった。

核の汚染がない地域での食料生産で、十分にまかなえる人口にまで人々は衰退したのだ。

このような時代を生きてきたのが俺たち『奪われた世代』である。

第 1 話：奪われた世代（後書き）

ダラダラと説明してたら長くなりすぎた気が……。

第 2 話..久方振りの登校

俺が物心ついてから見聞きしたニュースは、暗いものばかりだった。

TVのニュース番組は毎日気分が悪くなる話を垂れ流すばかり。

日々悪くなっていく世界の情勢。

この世界に未来はない。

まるで世界が終わっていくようだ。

暗に語られる言葉たち。

俺はそれに反発するように、がむしゃらに生きて、そして成長していった。

胸にあったのは、「なぜ俺たちがこんな思いをしないといけないのか」という憤り。

おそらく、『奪われた世代』の子供は同じ思いを抱いていただろう。

このように、日々に苦悩し、時に折れそうになる心を友と支え合いながら生きてきた。

そして一年前。

俺たちの預かり知らぬところで戦争が始まった。

それから不安に押しつぶされるような日が続いた。

世界で起こっている事を聞き、明日は我が身と恐怖で眠れぬ夜を過ぎた。

そのような日々での数少ない楽しみは、学校という唯一残された日常だった。

学校で会う友達に愚痴を言い合った。

不満もぶつけ合った。

襲いかかってくる恐怖に一緒になって励まし合った。

時には折れそうな心を慰め合い、助け合った。

もちろん、バカなことと言って、ふざけ合い、最後には笑いあった。

そうやって学校という場所は、俺にとって何よりも大切な場所となっていた。

不安な日々の連続でも、時は流れていく。

いずれ起こると予想していたことが、ついに起きた。

できれば起きて欲しくなどなかったのに……。

そんな願いは聞き届けられることはなかった。

――戦火が日本にまで拡大したのだ。

今だに本土まで攻撃の手は伸びていないものの、それも時間の問題だと誰もが理解していた。

いずれ来るだろう攻撃に備えて、都市部の人々は田舎への疎開を開始していく。

東京でも多くの人が疎開していった。

まだ学校は続けられているものの、生徒の数は目に見えて減っていく。

それでも俺は毎日学校に通った。

親にも無理して学校に行く必要はないと言われたが、やめたりはしなかった。

学校は唯一残された平穏の象徴。

俺はそれをひたすらに守りたかったのだ。

それは俺の幼馴染達もそうだろうし、同じく学校に来ていた奴らも同じ思いだっただろう。

しかし、この日々は長く続かなかった。

日本本土への侵攻が開始され、ついに学校の休校が決まったのだ。

必要なときを除き、終戦まで教育機関の無期限休校。

これが政府の決定だった。

——俺たちの何が悪い。

——なぜ俺たちがこのようなことに巻き込まれないといけないのか。

この時、俺の中でくすぶっていた思いが露^{あらわ}になった。

その思いは、今まであまり感じたことのない思い、怒りだった。

生まれてこの方、この世界に対しての不安や恨み言を呟いたことは幾度もあった。

しかし、怒りを覚えたことは一度もなかった。

おそらく馴らされていたのだろう。

周りの大人たちからお前たちは『奪われた世代』だと教えられ、一つ、また一つと俺の手からあって当然だったものが消えていく。

さらには、不安や絶望が蔓延した世界で、心は圧迫され、押しつぶされ、そしてすり減っていく。

だんだんと心が麻痺していったのだと思う。

奪われることに対して、諦めの感情しか働かなくなるほどに。

しかしこの日、俺の心に静かな怒りが確かに芽生えるのを感じた。

学校が休校になってからは、俺にとっての世界はつまらないものとなった。

唯一やることと言えば、時々幼馴染達と会い、お互いの無事と近況報告を行うことくらいだ。

確かに幼馴染達と会うのは楽しい。

けど学校という場で、同じ時間を共有しながら話し合うということは、もはや望めないことだった。

この時は、休校になった学校も、その全てが止まっているというわけではなかった。

最近、一日だけ学校が開かれたのだ。

——入学式という形で。

……といっても俺には関係の無いことなのだが。

ところで、なんでこんな時に入学式など、と疑問に思うことだろうから説明しておく。

結論から言うと、俺が通っている鳳声高校は中学、高校、さらには

大学の一貫校であるためである。

そのため、新規入学者はいなくとも、持ち上がり式で入学してくる新入生は存在するのだ。

まあ、いくら入学生がいるとはいっても、戦争中でいつ攻撃されるかわかったもんじゃないこの時期に、入学式なんて普通やらない。

しかし、あえて入学式を執り行ったのには理由がある。

それは、終戦が間近だと予測されたためだ。

この時には既に戦争が下火になっており、世界は核により破壊尽くされたあとであるため、各国は戦争を続けることができない状況であつたのだ。

こうして、せめて入学式くらいは執り行おうという心意気の下、新入生たちはこの鳳声高校に入学してきた。

そして先日、待ちに待った終戦が発表された。

——最悪な報告と共に。

終戦。

それに伴い、学校が生徒集会を行うことを決定。

そして今日、久々に東京に残っていた生徒たちが学校に集まったの

だった。

しかし、それは俺たちにとって喜ばしいものではなかった。

なにせ終戦に伴い、国がなくなることが発表されたのだから。

ならば今日集まる理由など容易に想像がつくだろう。

そして先ほど……。

——学校がなくなることが校長の口からはっきりと告げられた。

学校が正式に閉校となるのは5月から。

それまでは授業は行われないものの、学校は開放され、自由登校となった。

おそらく、この対応がこれから学校という当たり前だったものを失う俺たちへの配慮であろうことは容易に想像がついた。

これらを集会にて連絡し終えたところで校長の話は終わり、生徒集会は解散となった。

集会が終わると、特にあてがあったわけではないが、俺は教室に向かっていた。

集会の後は好きにしてもいいとのことだったので、久々に教室に行きたくなったのだ。

俺は帰ろうとする生徒たちを脇目に、自らの教室に向かった。

本当に久しぶりの登校だった。

教室の前まで来ると、学校独特の引き戸に思わず懐かしみを覚えてしまった。

懐かしの引き戸に手を添え、ゆっくりと開き、自分の教室に足を踏み入れた。

どこか席に座ろうと思い、歩き始める。

しかし、その歩みは途中で止まってしまった。

教室には自分の席などというものは存在しないため、どこに座っているのかがわからなかったからだ。

仕方なく、俺は窓際の列、その一番後ろに適当に座ことにした。

少し補足（閑話休題）をしておく。

先ほど「自分の教室」とあったがこれは正確には異なる。

この学校には、かつて7つのクラスが存在しており、それぞれが異なる教室を割り振られていた。

しかし、度重なる生徒の減少により、一つ一つのクラスの人数が少なくなっていたため、クラス同士を合同していったのだ。

そのため、今では自分のクラスを含めたすべてのクラスが合同した合同クラスが一つしか存在しないのだ。

さらには、合同クラスでは、自分の席というものは存在していない。一つ、また一つと減っていくクラスに対して、生徒の席を逐一決めていくことが手間になったため、好きな席に座ってもいいという事になったのだ。

窓からは帰路につく学生が黒い点となりまだら模様を描いていた。

それを見つめながら、少しの時間ぼーとしてみると、戸が開く音が聞こえた。

突然のことに、少し驚きを覚えながらも、音のした方を見た。

「よっ」

そこには、俺の幼馴染の一人、タカアキが立っていた。

タカアキは軽く挨拶をしたあと、俺のところまで歩いてやってくと、隣に席に腰を下ろした。

「なあ、シュウ」

俺の方をむいて椅子に座ったタカアキは、真面目な顔をして言った。

「——ん？」

「これからどうなるんだろうな……、俺たち」

耳に届くタカアキの声は……、暗い。

それは暗い未来しか考えられない俺たちには答えられない質問だった。

——黙して語らない俺。

すると、いつの間にかケンジと京子が教室にやって来ていた。

そして、二人を追いかけるようにして咲もやってくる。

これで5人。

俺の幼馴染達、そして親友たちだった。

「二人で何話してたんだ？」

3人が俺の近くに来て、ケンジが聞いた。

「ん？ 俺たちのこれからについてだよ。

いったいどうなっちまうんだろうなってこと」

俺はあえて少し明るめに答えた。

「うーん……。これからか」

「これからねえ」

ケンジと京子が答えた。

「……ダメだ。考えてもわかんね。どうにもなんねんじゃねえのか？」

「――アンタ、こんな時でさえまともに考えられないのね。バカ丸出しよ」

「なにおう」

ケンジと涼子の掛け合いに、場の空気が少しだが軽くなる。

そこに咲は言う。

「……でも、ケンジ君の言った通りだよ。どうにもならない。悲しいけど……、私たちじゃどうにもできない」

「……………」

咲の言葉に、俺たちは黙ってしまった。

それぞれ思うことはあるのだろうが、誰もそれを口にしなかった。

この立ちはだかる現実を前にしては――。

それが分かりきっているからこそ、誰も二の句が告げない。

「――だけどさ」

しかし、俺のつぶやきが沈黙を破る。

「だけどさ、ほんとにどうにもなんねえのかな。

俺たちは今まで奪われてばっかだった。

だけど……。けどさあ、少しでも取り戻せないのかな」

胸にくすぶっていた思いをみんなに打ち明ける。

みんな、俺の方を向く。

そして何やら考え込むように、押し黙った。

「……。ああ、取り戻したいよな」

一番に答えたのはケンジだった。

「——そうだな。当然のごとく学校に通えてた日々に、俺は戻りたい」

「私もそう思う。昔みたいにみんなで仲良くお昼ご飯とか食べたいよね」

「あの時は楽しかったよな」

そしてタカアキ、咲、京子がそれに続いた。

その後は、各自溢れ出すようによみがえってくる楽しかった思い出

を、思い思いに語り合った。

そんな久方振りの楽しい時間の訪れ。

そのような時間はあっという間に過ぎていき、最終下校の時間を校舎の鐘が告げた。

懐かしいその鐘の音を聞き、今日は解散となった。

帰るときはみんな『また明日』と言って別れる。

——自由登校なら、明日も学校で会おうぜ。

そんな言葉にしない約束を交わし、俺たちは解散するのだった。

第 2 話..久方振りの登校（後書き）

よろしければ、感想等お願い致します。

（O*。
|。
）Oペコッ

第 3 話：想い

4人と別れ、家に帰りつくと、俺は自分の部屋に一直線に向かった。家に帰ってきたときには、父さんも母さんもいなかった。

今日も遅くまで色々と頑張っているんだと思う。

今は誰も俺たちを助けてくれない。

だからこの街の人たちは、お互い助け合い生きていた。

部屋に入ると、電気も付けないままベッドに倒れこんだ。

窓からは、沈もうとしている太陽の光が眩しく差し込んでくる。

俺はベッドの上で仰向けになり、もそもそと体を動かす。

久々に着た学生服のボタンを外し、寝転がったまま上着を脱いでいく。

脱ぎ終わった黒い学生服を、視界に入った椅子に投げかけた。

体がわずかな開放感に包まれると同時に、俺は脱力した。

一息つくつと、頭に浮かぶのは……、今日の事。

終戦。

政府の決定。

校長が行った言葉。

そして……。

——学校が終わること。

落ち着いて思い返すと、心の奥底から喪失感が湧き上がってくる。

また大切なものが、手のひらからこぼれ落ちていく。

そんなイメージが、頭に浮かんできた。

こぼれ落ちていくものをつかみたいのに……。

つかみたいのに、それが叶わない。

「——なんでだよ」

憤りとともに、胸の内に燻^{くすぶ}っていた怒りが込み上げてくる。

「俺は……、俺たちは平穏な日々すら望んじゃいけないのかよ。

明日に希望すら抱いちゃダメなのか。

将来のことを語ることすら許されないのか――」

仰向けのまま、自分の手を差し込んでくる太陽に向け、透かすようにして見つめた。

「俺はまだこの手で何もつかめてない。

今までは奪われてばっかだった。

だけど、もう奪われたくねえよ。

例えこの手からこぼれ落ちそうになっても……。

失わずに済むように……、つかみとりてえ」

そう思い、目を閉じる。

胸に抱いた思いと共に、俺の意識はゆっくりとまどろみの淵に沈んでいった。

……………。

……………。

……………。

「シュウ、ご飯よ」

「――っ！」

俺は母さんの声に体を跳ね起こした。

目に映るのは、真っ暗な自分の部屋。

窓から差し込んでいた優しい光は、最早見る影もない。

どうやら俺は、いつの間にか寝てしまっていた。

そのことを自覚し、俺のことを呼んでいる声に返事をする。

「ああ、今行くよ」

母さん、いつ帰ってきたんだろう……。

寝ぼけ頭でそんなことを考えつつ、部屋を出てリビングに向かった。

リビングの奥にある食卓には、父さんが既に座っていた。

もう40を迎えようとする父さん。

その顔は、この一年でかなり老け込んだように思えた。

いつもはむずかしくこわばった表情を浮かべている父さんも、今日は少しばかり表情が緩んでいるように見えた。

――やっとな戦争が終わったからだろうな。

人類は、とんでもない間違えを犯してしまった。

取り返しのつかない戦争。

あまりに少なくなった人類はもう、かつての生活を営むことはできないだろう。

だが、それでも戦争は終わり、これから復興が始まる。

それを思うと、少しではあるが未来が残されているような気がした。

おそらく同じようなことを考えて、父さんもいつも張り詰めていた緊張が緩んでいることが分かった。

父さんは今、務めていた会社を辞め（戦争のためほとんどの市民は職というものを失っている）、街の自治のために動いている。

今の情勢では、政府は国民に食料の供給以上のことはしてくれない。

誰も助けてはくれない。

だったら自分たちがやるしかない。

そのため、街を維持し、人が最低限生活をしていくために必要な様々なことを街の人たちと協力して行なっているのだ。

そのようなか、父は自警団に加わっている。

今、警察という組織はほとんど機能していない。

そのため自らを守るために、街の住人は自警団を組織したのだ。

その自警団に加入している父は毎日、様々な問題と直面しているみたいでいつも厳しい顔をしていたのだ。

「――父さん」

「おう、シュウ。やっと来たか」

「うん。父さん、今日は少し嬉しそうだね」

「ああ、やっとこの戦争も終わったからな。」

あの息苦しかった日々もやっと終わる」

そう父さんが嬉しそうに話していると、母さんがオカズを盛り付けた大皿を持ってやってきた。

「シュウ、席に付きなさい。ご飯にしましょう」

母さんはそう言うと、持っていた大皿をテーブルの上に置くと、再びキッチンの方に戻った。

それを見ていた俺は、母さんを追いかけるようにキッチンに向かった。

「母さん、自分お分は持つよ」

三つのお茶碗を取り出し、ご飯をよそっていた母さんにそう言うともうつがれて自分のお茶碗を持つ。

「あら、ありがとう。シュウ」

その言葉に少しくすぐったさを覚えつつ、ついでにと父さんのお茶碗も持ち、食卓に戻った。

続いて自分の分のお茶碗を持って、母さんが食卓につく。

「さあ、いただきますよう」

母の言葉と共に、三人で「いただきます」と言ったあと、俺は机の上の料理に箸を伸ばした。

自分の前には、ご飯のよそわれたお茶碗とオカズの乗った大皿が一つ。

少ないと思うかもしれないが、食糧危機、そしてそれによる戦争さえ起こっていた時代では普通である。

むしろ食料生産プラントを十分に持っている日本だからこそ、こうやって毎日食事に有りつけているのだ。

そのことに感謝しつつ、大皿に盛り付けてあるオカズをひと切れつかみ口に運ぶ。

「——んっ」

口の中になんとも言えない食感と味気なさが広がった。

「これ合成タンパクか」

合成タンパク――、食料生産プラントでアミノ酸を合成し作られたタンパク質の塊である。

要するに肉もどき。

しかし、肉のようなものを合成できるからといって、所詮は人工的に作られた数種類のタンパク質の塊である。

本物の肉のような奥深い味はもちろん、その食感には及ぶべくもない。

お世辞にも美味しいと言えるものではなかった。

この配給で配られた合成タンパクの肉もどきを、母さんは調理という過程を経て、見事に見ただけは美味しそうに肉の様相に仕立て上げたのだ。

そのため初見では区別がつかなかったが、口にしてみれば一目瞭然である。

いくら母が料理上手といえど、この味はどうしようもない。

ひどい喻えになるが、食べ物ではないものを美味しく食べれるようにしろと言われたって、世界一のコックでも無茶な話だろう。

まあ、合成食料は食べることもよりも栄養のことを第一に考えられているだけで、一応食べ物なんだが。

とりもかくにも、この味がなんともならないことはわかりきっていた。

しかし、まずいものはまずいよなあ。

そんなことを思い、渋い顔をしていると、父さんが話しかけてきた。

「まずいなんて言わずにちゃんと食べろよ。」

せっかく母さんが料理してくれてるんだから」

「ん。わかってるよ」

いくら不味いといったって、この合成タンパクの塊がなければ、最悪俺たちは飢えて死ぬことになっていたはずだ。

米以外の食料自給率が乏しい日本が食糧危機の被害を軽度抑えたのは、紛れも無くこれを作る技術なのだから。

「ところで今日学校はどうだったの？ 久々の登校だったでしょ」

話は変わり、母さんが今日のことを聞いてくる。

「……、学校がなくなるって報告があっただけ。」

そのための集会だったよ」

俺は今日のことを思い出し、すこし投げやりに答えた。

それを見ていた母さんは、顔をしかめなんとも言えない表情をする。

「――そう。残念ね」

一言告げると、母さんはこれ以上何も言わなかった。

当然、今日の事はここにいる全員が予想していたことである。

それでも、軽い話ではなかった。

……。

……………。

……………。

無言で箸を動かすだけの食事が進んでいく。

ある瞬間、父が切り出した。

「――シュウ」

「……なに？」

「お前には言っていなかったが、5月には実家に帰ろうかと考えてる」

父さんの実家は埼玉の田舎にあり、農家を営んでいる。

この時代、農家というのはとても尊ばれている。

さらに自分たちは、食料に困ることをあまり考えなくてもいいのだ。なんたって食料を作り、ある程度は自分で自由にできるのだから。

「今までは学校のこともあり帰ってなかったが、これを機にみんなで帰ろう。」

そして畑を耕しながら、一緒に美味しいご飯を食べないか？」

「……………」

父さんの言っていることは当然のことである。

もはや戦争は終わり、どこにいても危険の度合いは変わらない。

とすると、食料の心配がない実家への帰省を考えるのは当たり前のことである。

しかし、俺はその提案に肯けずにいた。

頭に浮かぶのは、あいつらのこと。

タカアキ、ケンジ、京子……、そして咲。

もし帰省するならば、俺の大切な幼馴染たちにもう会えないかもしれない……。

今、気軽に連絡を取り合う手段は残されていないのだ。

ケータイなんて繋がらない。

電話もできない。

手紙は出せるが、その値段は跳ね上がっている。

とても容易に出せるものではない。

かつては万人が使えたケータイ。

それも今ではどこに行っても圏外である。

固定電話も通信会社自体が運営をやめているので今では限られた人しか使えなくなっている。

この一年ばかりの戦争で人類の生活は大幅に後退した。

多くの技術が失われていったのだ。

なぜ技術が失われたのか。

——答えは簡単だ。

技術を持つ人がいなくなったからである。

技術とは本来、人が考え、習得し、伝えていくものだ。

その技術を持っている人がいなくなってしまうかどうか。

技術とは、本などの文献の中でしか存在しないものになってしまうのだ。

ただ、その文献自体も今ではどれだけ残っているか……。

とにもかくにも、技術とはその本質を人が担っているものである。

そして今、人と共に最先端技術と呼ばれた多くは姿を消した。

ロストテクノロジー。

今では電化製品がその代名詞となってしまった。

もはやPC一台壊れたからといって、修理できないのだ。

そのような時代になってしまった。

いずれ人の生活は昭和の日々のことだろう。

そこから始めなければ復興などできないのだから――。

話は戻るが、俺は父の言葉にはうなずけないままであった。

そして、そのまま食事が終わる。

「……ごちそうさま」

そう小さく告げると、後は何も言わないまま部屋へと帰っていった。

——暗い部屋。

ベッドに倒れ込み枕に顔をうずめる。

「ああ、このままみんなとも会えなくなる……」

締め付けられる胸。

そこには、今日二度目の……、それでも確かな喪失感があった。

「ハハハっ……、また一つなくなりそうだ」

その日、久しぶりに俺は——。

涙を、流した。

もう奪われたくない、そう思っていた矢先のこと。

既に次のものを失おうとしていたのだら。

第 3 話：想い（後書き）

なげーよ。ヾ（▽ゝ；）

——本当に申し訳ありません。今回も長くなっちゃいました。

次回は、次回こそは頑張りますのでお許しを。

ということで、よろしければ感想等ございましたら是非是非よろしくお願いします。

第 4 話..登校

.....。

.....。

.....。

翌朝、鳴り響くケータイのアラームで俺は目を覚ました。

ここ一年でケータイは電話としての機能を失ったが、目覚まし時計としては未だ現役であった。

そのケータイを昨夜置いた場所、確か枕の隣。

そこにケータイを探して手を伸ばす。

この時、俺は未だに布団から出ておらず、目も半開き。

当然のごとくケータイのアラームは今も鳴り響いていた。

枕の隣を右に左にと探っていると、プラスチックの冷たい感触のものが手にぶつかった。

それを手に取り、俺は眠気に目をこすりながら、ケータイのアラームを切った。

アラームが鳴りやんだ事を確認すると、ベッドにしがみつきたい気持ちを抑え、踏ん切りをつけて起き上がる。

ついでにと、手に持ったケータイで時間を確認。

現在時刻、7時ちょい過ぎ。

よし、いい時間に起きたな。

そう判断すると、俺は学校に行くために、制服に着替え始めた。

制服に着替えていると、ふっと昨日のことが頭に浮かんだ。

.....。

いくら考えないようにしようとも、どんどん頭を占めていく。

胸のわだかまりは解けることなく、深くなるばかりだった。

たった一言。

——実家に帰らないか？

父さんの言葉が俺を思い悩ませた。

この提案に今だ答えは出ない。

常識的にどちらを選択すべきなのかは分かりきっている。

だが、納得など出来るはずがない。

答えが分かりきっている問いに、未だに答えられないでいるのだ。

矛盾。

それゆえのイラつき、やるせなさ。

そのような気持ちを抱えたまま俺は朝食を食べに食卓へと向かう。

食卓では父さんが既に席についており、朝食を食べていた。

「シュウ、おはよう」

父さんは、俺の姿を確認すると一言、軽く声をかけた。

「おはよう」

俺もそれに返し、食卓に座る。

すると、キッチンから母さんがトーストもどき（合成食料シリーズのうちの一つ）の乗った皿を俺の目の前に置く。

「おはよう、シュウ」

「ありがとう、母さん」

俺は机の上にあったバター（もどき）をトーストに塗ると、それを口に運んだ。

まずい食感（まるでふくら感のないパンのような）が口に広がる。

予想通りではあるのだが、なんとも……。

そう思っていると、父さんが話しかけてきた。

「シュウ、今日も学校に行くのか？」

口の中のパンを喉に流し込み答える。

「ああ、4月中は登校するつもりだ」

「そうか、気を付けてな」

「ああ」

何気ない会話をしながら俺はパンを咀嚼し続けた。

食べ終わると、お茶（牛乳はもはや嗜好品である）を飲み干し、席を立とうとする。

「――シュウ」

父さんがためらいがちに声をあげた。

「どうした、父さん？」

「昨日のこと、考えといってくれよ」

昨日のこととはもちろん実家への帰省のことである。

父さんが俺に考えろということは当然のことだ。

——それはわかってる。

本来なら、俺の意思など関係なく決めてしまってもいいようなことなんだから。

——理解はしている。

それでもあえて俺に考えてくれというのは、父さんなりの優しさなのだ。

——そう、わかってはいるんだ。

わかっているけど……、わかりたくない……………。

今父さんが言った言葉。

それは父さんなりの思いやりのこもった言葉である。

だけど、今の俺の耳には、返事の催促の言葉に聞こえている。

「……ああ、わかってるよ」

俺は父さんの言葉に苛立ちを覚え、不機嫌に突っぱねてしまった。

行ってしまった言葉とともに沸き起こる後悔。

しかし、もう止まることはなく、振り返らずに早足で玄関へと向かった。

——ああ、最悪だ。

——ごめん、父さん。

口に出せない言葉を心の中でつぶやく。

もはや、おそい謝りの言葉。

まるで心の中ではつきりと言葉にすると、父さんに伝わるとでも思っているかのように俺ははっ

きりと心の中でつぶやいた。

そうやって、玄関に早足でむかった。

靴を履き終わると俺は、外に出た。

すると……。

「おはよう、シュウ」

俺の目の前には、咲が立っていた。

「……ああ、おはよう」

俺が戸惑いがちに応える。

「えっと、咲が迎えに来るなんて久々すぎて、驚いたよ」

昔、俺と咲はいつも一緒に学校に行っていた。

咲は俺が幼稚園に通っていた頃からの付き合いである。

家が近いこともあり、小さい頃にはよく遊んでいた。

あの頃の咲は引っ込み思案で、さらには人見知りで常に俺のあとを付いてくるような女の子だった。

そんな咲とどうやって仲良くなったのか。

きっかけは何気ないことだった。

幼き日のある日、俺の家の前で迷子になっていた咲を見つけた。

そして、当時の俺は蛮勇にも、一緒に咲の家を探して町中を練り歩いたのだ。

はじめは泣いていた咲も、一緒に歩くごとに泣き止んでいき、そして少しずつ二人の距離は近づいていった。

最後には仲良く手をつなぎながら、街を歩き回るといふ状況にまで至ったのだ。

それ以降はいつも俺のあとを、カモの親子のように付いて回るようになり、そして右葉曲折あり今に至る。

「久々に一緒に学校に行きたくなって……。ダメだった？」

咲は少し不安げに首をかしげている。

「うっ」

俺は昔から咲のお願いに弱かった。

昔はいつも一緒にいて、咲は俺の後ろをトコトコ付いてきていた。

そんな咲のことを、当時の俺は妹のように感じていた。

そんな咲からのお願いは、兄として叶えてあげたくなるのだ。

さらにはここ最近ぐっと可憐に、美少女として成長してきている咲にそんな顔をされてしまっはイヤなんて言葉は口から出るはずも

ない。

「……？」

「あつ、ああ、久しぶりに一緒にガッコに行くか」

視線を咲から少しそらしがちに答える。

「ん。ありがとう」

すると咲は花が咲いたように笑った。

「うっ……」

咲の笑顔に魅了されてしまう俺。

顔は少し赤くなっていたかもしれない。

それを不安に思い、咲とは別の方向を向く。

昔は咲と一緒に登校していた。

しかしある時期を境にそれはなくなっていた。

それは少年・少女に訪れる、思春期というものが原因だ。

はじめ、俺は咲のことを妹のように思い、何も気にしていなかった。

しかし、成長と共にクラスメイトが咲へと向ける視線の意味が変わ

ってきたのだ。

それに気づいた俺は、情けないことに、そこで初めて咲が魅力ある女の子だと認識する。

そうなってしまうと不思議なことに、急に咲のことを意識し始めたのだ。

俺は咲のことを一人の女の子として見るようになっていった。

——妹ではなく。

それ以降は、咲も何となく察したようで、お互い無言の了解の下、一緒に登校はなくなる。

何はともあれ、久々の二人っきりでの登校だった。

昔のように俺の少し後ろを歩く咲の顔を横目で見る。

最近、咲はますますその可愛さに磨きをかけていた。

俺は横目に咲の顔を見つめる。

その顔は、はっきりとメリハリのある顔立ちではあるが、その持ち前の性格・雰囲気のためかキツめのイメージを受けず、その表情は柔らかな印象を相手に与える。

肩あたりまで伸ばした、少し黒みがかった金髪はさらにそのイメージを強調しており、かなりくさいセリフで表現するなら、一瞬天使

と見間違うほどである。

さらに最近は、体つきも女性的にふっくらとしてきており（どこがとは言わないが）、さらに天使のイメージに近づいてきているのは言うまでもない。

「どうかした？」

俺はついつい咲を、横目ではなく真正面から見つめてしまっていた。

「いや、なんでもないよ」

首を痛めるんじゃないかと思う速度で、俺は前に向き直った。

そんな俺をみて、咲は不思議そうに首をかしげるのだった。

第 4 話：登校（後書き）

よろしければ評価、感想等よろしくお願いします。

第 5 話..悩み

右葉曲折ありながらも、俺と咲は無事学校にたどり着いた。

下駄箱で靴を履きかえ、教室に向かう。

引き戸を開けて、中に入ると、決して多くはないが少なくない数の生徒がいた。

登校するには少し早めの時間。

でもこれだけの人数の生徒がここにいる。

これだけを見ても、この同級生たちがこの学校に何かしらの思いを持っているのが見て取れた。

その事実には、俺は少し嬉しくなりながらも、昨日と同じ席、窓際一番後ろの席を目指した。

「シュウっ、それに咲も、おはよう」

するといきなり、京子に声をかけられた。

「おうっ、シュウ。咲も、はようっ」

そしてケンジもそれにつづく。

例の席の周りを陣取りながら、挨拶を投げかけてくる二人。

べつにそこは俺の指定席ってわけじゃないんだがな……。

そう思いながら、俺は手を挙げながらそれに応え、着席した。

咲も律儀に二人にそれぞれ挨拶してる。

そして咲は俺について、その前の席に座った。

席としては、窓際一番後ろが俺、その前が咲。

咲の隣に京子、俺の隣の席を開けて、そのさらに隣にケンジとなっている。

俺の隣の席には、机の上に荷物が載せてあった。

おそらくタカアキのものだろうと思う。

「にしても、二人とも早いなあ。さすが体育会系。朝練でもあったのか？」

「ちょっと、朝練なんかあるわけないでしょ。確かに私たちは体育会系の部活に入ってたけどね。」

残念なことに部活はもうやってないんだから」

京子は俺のちょっとしたジョークに軽く答えてくれた。

しかし、横から予想外な返答が返ってきた。

「ん？ 朝練ならあったぞ」

「「あったのか（よ）！」」

三人で各々に驚く。

「おいおい、ラグビー部は戦争などに左右されずに練習か？ まさしく猛者の集まりだな」

「いや、俺一人だぞ」

「ん？ ケンジ君、それということ」

「自主的に一人で朝練をな。俺の日課だ」

「——おお。すげえー、さすが筋トレが趣味ですと恥ずかしげもなく公言してるだけある」

「さすがだね、ケンジ君」

俺と咲が驚いていると、京子がひとり不思議がっていた。

「えっ、そんなに驚くこと？ 私週に4日は朝走ってるけど。

それに時間あるときは、走ったりしてるよ」

「「……………」」

「えっ、ええっ。ダメなの？」

だって、私走るの好きだし。

陸上部の活動がなくなってから、じっとしてるのがどうも落ち着かなくて……」

「だよなあ、京子。俺もそんな感じだ」

二人の会話に一瞬、言葉を失う俺と咲。

「……、さすが『体育会系』。ごめん、俺ちょっと甘く見てたよ」

「だねえ、もしかしたら私たちの方がマイノリティーなのかな」

俺と咲が口々に漏らしていると、タカアキが帰ってきた。

「おう、シュウ、咲。来てたのか。おはよう」

「あ、ああ。おはよう」

「あつ、タカアキ君。おはよう。どこ行ってたの？」

「ん？ ちょっとトイレにな。それよりもどうした？」

なんか二人とも困惑してるみたいだが」

「ああ、ちょっとな」

俺と咲は、タカアキに今までのことを説明した。

「————でな」

「うん、それでね。————なんだ」

ひと通り説明し終わると、タカアキは押し黙った。

「……………。大丈夫だ。それは奴らが生粋の体育会系バカなだけだ。安心しろ」

「よかった、俺たちは普通だったんだな」

「うん、マイノリティーじゃなかったね」

俺と咲は安堵のため息を漏らした。

すると今度はケンジと京子の二人がブツブツ言い出した。

「えええ、絶対普通だよ」

「まったく。このくらいみんなもやってることだ」

「「うるさい、この体育会系バカップルめ!」「」」

二人が口々に言うのを、俺たち3人は一括する。

「……………」

「……………」

すると二人は頬を赤く染めながら、お互い軽く反対方向をむいて、京子はブツブツとつぶやき、ケンジはぐうの音を吐いた。

「えっと、私たちそんなじゃないし。カップルで……」

「ぐう、……うゝむ」

そうやって、今日もいつもの5人で楽しい時間を過ごした。

学校に来て、みんなでたわいもない話をする。

学校といっても、授業はないのだが、それでも十分『学校』を満喫したのだった。

しかし、人間とは不思議なもので、学校に授業があったときは、あまり進んで受けたいものではなかったけど、いざなくなると受けたくなるのだ。

ほんとに不思議である。

——しかし、俺は学校がなくなるという事実に加え、父に言われたあのことを今だに引きずっていた。

今だに返答をしていないのだから、引きずるのは当然なのだが。

なんだかこう、胸の当たりがモヤモヤして、全然スッキリしなかった。

そうやって時間は過ぎていき、午後になる。

そして今日も無事解散となった。

これは授業もないので、誰も昼ご飯を持ってきていなかったからだ。それにお互いいろいろ予定などもあることを考慮して、解散となった。

ケンジと京子は、ぼそっと、「さて、これから自主連でもするかな」とか「走りに行こうかな」なんて言っていたけど……。さすが体育会系バカ二人である。

そんなこんなで帰り道。

俺は今朝と同じように、咲と一緒に帰っていた。

「ケンジ君と京子ちゃんもこれから練習ってつぶやいてたね……」

そう言いながら、咲は苦笑した。

「ああ、そうだな。どんだけ体動かすの好きなんだよ、あいつら」

俺もそれに苦笑しながら返す。

「……………」

「……………」

いつの間にか言葉がなくなり、沈黙が訪れる。

「……………」

「……………」

「……………ねえっ、シュウ？」

不意に咲が俺の名前を呼んだ。

「なんだ？」

いきなりのことに少し戸惑いながらも答える。

「——シュウはさ……、何か……悩んでる？」

俺のことはギクリとした。

「——どうしてそう思った？」

俺がそう言うと、咲はいきなり俺の前に出て、足を止めた。

いきなり飛び出てきた咲にぶつかりそうになるのを、なんとかこらえる。

それを見て、さらに咲が言う。

「今日のシュウ、なんか変。何も無いように見えて、どこかおかし

い……」

咲はじっとこちらを見つめる。

「――――」

お互いが見つめ合う時間が続き、俺は気まづくなって目をそらした。

「ほらっ、目そらした。やっぱり何かあるでしょ」

そりゃ、お前が可愛いから照れたんだよ。

とは言えず口ごもった。

「何かあるなら、言ってよ」

「――そりゃ、学校もなくなるんだ。悩みくらいあるさ」

俺は咲の問いに表面的なことでごまかすことにした。

しかし、間違いじゃない。

間違ったことは行ってなかった。

確かに学校がなくなることにも悩んでいたからだ。

「――――」

再び咲が俺を見つめてくる。

そして言った。

「――、違う」

「――っ」

「それだけじゃないでしょ。もっと何かある」

――そのとおりだった。

「話してよ。私には話せない？」

咲は悲しそうにうつむいた。

その姿は、風に揺られ、今にも折れてしまいそうな一輪の花のようだった。

「私、シュウの力になりたいよ……」

「……ああ、分かった話すよ。」

実は俺の父さんがさ、5月になったら埼玉の実家に行こうって。そう言ってるんだ」

「……………」

俺の言葉に咲は黙って耳を傾けていた。

「このままじゃ俺は5月には埼玉に行くことになる。」

……みんなと……、咲と別れることになるかもしれない」

咲は俺の言葉に、またうつむいた。

もしかしたらと思うが、咲は今にも泣き出しそうになるのを我慢してるように見えた。

「学校もなくなっちまう。それに加えてみんなと会えなくなるなんて考えられねえ。考えたくもねえ」

俺の独白は続く。

「俺、もう何も失いたくねえんだよ。

学校だって、みんなのことだって失いたくねえんだよ。

だから、俺が今失おうとしている者たちを、咲をつかむためになんか出来ねえのになって……。

そんなことばかり考えてた」

咲は俺の言葉に、顔を上げた。

咲の瞳は予想通り潤んでいた。

「俺のワガママいなるかももしれねえ。

けど、けどっ、失う前に足掻いてみてえんだ。

もう何もわからないままに、奪われるのは嫌なんだ。

だから……………」

「……シュウ」

咲は少し震えた声で、俺の名前を呼んだ。

「私もシュウと離れたくない」

そう言うと、咲は俺の方に一步近寄り、学生服の袖をつかんだ。

そして袖をギュッと力を込めて握った。

「みんなも絶対にそう言う。——それを抗うために、シュウが何かするなら……、それがワガママだっていい。」

なんだっていい。シュウが決めたことなら、シュウが決めてやろうとすることなら、私なんだって応援する。私も力になるから」

咲の叫ぶような思いに胸が熱くなった。

いいきると、咲はうつむく。

「けど……………、私何もできないかもしれない。昔からシュウの後をついてくばかりだった……」

そんなことないっ。

俺はそう叫びたかった。

しかし、間を空けず咲は言った。

うつむいた顔を持ち上げ、決意のこもった目で俺を見つめながら、
今までで一番の力を込めて。

「けど、これだけは言える。――私は今までも、これから、ずっと
とシュウの――、味方――だよ」

瞬間、俺は頭が真っ白になった。

あまりにも強い咲の想いに、俺は体が震えた。

何を悩んでいる。

これほどまで、俺を想ってくれている人がいる。

さらばその人の期待に応えなければ。

――何をすればいい？

そんなの決まってる。

――それがワガママでも？

そのワガママを認めてくれる人がいる。

――その行動は人に非難されるかも……。

ここに俺の味方がいるだろ。なら大丈夫だ。

——この胸に決意を……。

俺は……、もう何も失わない。

取り戻してみせる。

第 5 話：悩み（後書き）

よろしければ、評価、感想等よろしくお願いします。

第 6 話：行動

あの後、俺は咲に心からのお礼を言った後、「ごめん、俺行かなきゃ」と言い残して走り出した。

咲を置き去りにしていく形になってしまったが、それでもじっとはしていられなかった。

——やるべきことは決まった。

ならば行動あるのみ。

そんな俺を見て、咲は後ろから手を振りながら、声をかけてくれた。

「シュウ、がんばって」

その言葉で、俺はもう後ろを気にせず、走っていった。

あとはもう、前へ、進むだけだ。

いそいで家に帰った俺は、まず何をするべきかを考えた。

自室にこもり、自分がやりたいことを実現するためにはどうすればいいのか、それをひたすら考えた。

やりたいことは一つ。

みんなと共に居れる場を守ること。

具体的には――、学校の存続。

それができれば、俺たちは離れ離れになることはないし、奪われたものも取り戻せる。

今までの奪われてばかりの人生のなかで、初めて取り戻せるのだ。

それは、とても素晴らしいことだろう。

しかし、どうやって？

それが問題だった。

今までは、きちんと国があり、地方自治体があり、学校を運営する場があった。

そして民主主義という方法で、それらの機関に対して自らの意思を伝えることも可能であった。

しかし、今ではそれは出来ない。

いや、できなくなってしまった。

たとえば、譲ることのできない訴えがあらうと、それをどこに言えばいいのか……。

国はなくなり、地方自治体も実質的に機能はしていない。

学校を運営していた者にそれを訴えたところで、聞き届けることができるのか？

——どだい無理な話だろう。

やりたいことが決まっても、やはりそれは前途多難なことであった。

だからといって、あきらめたりは出来ない。

咲にもあそこまで言ってもらったんだ。

ここであきらめてたら、咲に合わせる顔がない。

自室で椅子に座り、机に向き合い、あれこれ悩むのだが、どう頑張ってもいい案は浮かばなかった。

俺はそんなに頭のいい方でもないし……。

やはり一人で考えるのには行き詰まってきたのだ。

そこで俺が考えついたことは、近所にある図書館に足を運ぶことだった。

俺の知識でダメなら、外から知識をもってくるしかない。

そう考えた俺は、今だ細々と開館している図書館に足を運んだ。

図書館に行き、キーワードを「学校」に絞り、いろいろな文献をあたっていく。

とりあえず、学校にまつわる様々な問題、今まで起こってきた問題を知ることにした。

学校の成り立ち、西洋の学校について、日本の学校について、第二時大戦後の学校の移り変わりなど、図書館には様々な文献があった。数多く存在するそれらに目を通していく。

そのなかで、いくつかの文献が俺の目に止まった。

ひとつは第二時大戦後の日本で起きた学生運動について。

その学生運動では、様々な学生たちの意思や願いを実現させようとして、各大学でデモや授業ボイコット、ストライキ、大衆団交、果てはバリケードによる建物占拠などが行われたとあった。

それを読みふけていく。

その内容は苛烈なものであった。

時には死者すら発生したとも書いてある。

しかし、そこには確かに学生たちの熱く譲れない思いがあったことをありありと見て取れた。

——過激ながら、確かに意思を伝えるのには、とても有効である。

そう俺は感じた。

しかし、今の現状に置いて、その意思を誰に伝えればいいのか？

それがまるでわからなかった。

次に興味深いと感じたのは、西洋での大学の成り立ちについての文献であった。

簡単に要約すると、昔の大学では市民・学生が集まり、ギルドを作り、そのギルドが教師を雇い、授業を行っていたと書いてある。

それがだんだんと形となっていき、今の大学という教育機関となっていたのだ。

それはまさに学生たちによる、学生のための学園であり、その運営であると感じられた。

これを見るに、学校という機関は学生主体として運営が可能なのではないか、という選択肢が俺の頭に浮かんだ。

要するに、俺たちが集まれば、もしかすると学校を作ることが出来るかもしれないということだ。

しかし、それをどのように形作るかは全く考えつかなかった。

まず何から始めればいいのか、教師はどうするのか、制度は？

まるでさっぱりである。

そんなこんなをしているうちに、時間は5時となり、図書館は閉館となった。

俺は机に座り一人で、ウンウン悩んでいるところを、司書さんに捕まり、外に掘り出された。

そのように図書館から追い出され、俺は家に帰ることとなった。

家までの帰路、俺は先ほど調べたことを頭の中で整理する。

今までの学校においても、歴史の中で学生がその意思を伝えるための様々な運動が行われてきた。

これにより、俺がやろうとしていることが、やろうと思えば可能かもしれないこと、現実味のない夢物語ではないことが確認できた。

しかし、その難易度は桁違いだろうが……。

——可能性があるとわかれば、あきらめてなんてやるものか。

さらには、学校はその運営を学生が主体となって行える可能性があること。

これは最悪、学生を集めることで、自分たちで学校を作れるかもし

れないことを意味している。

そして、今日何より実感したことは、人の力だった。

人は一人で何かしようと思っても、小さいことしかできない。

しかし、10人、100人、1000人も集まるならば、計り知れないことが出来るだろう。

これはよく言われていることだが、今日ほどそれをはっきりと実感したことはなかった。

数は単純に力なのである。

学生運動をしようにも、学生による学校の運営をしようにも、俺一人ではどうしようもできない。

何より多くの人が必要なのだ。

このことをはっきりと確認できただけでも、今日は意義があったと思う。

そして……、これからの方針は決まった。

俺の考えに賛同してくれる人、協力してくれる人を出来るだけ多く集めること。

それを第一の目標として動くことを決めた。

「三人寄れば文殊の知恵」ともいうし、人が集まれば次にどうすれ

ばいいかも自ずと分かってくるだろうと考えたのだ。

曖昧なことかもしれないが、俺だけでは何もできないことは確かだし、ならば人の力を借りればいいのだ。

俺にはこれからどうすればいいかを、はっきりと計画だてることはできない。

ならば出来る人を頼ればいい。

俺は俺のできることをまずはじめよう。

そうはつきりと心に決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5669y/>

学校を取り戻す物語。

2011年12月2日21時48分発行